

第 2 部

兵庫県立こばと聾学校の現在と新しい活動

I はじめに

聴覚障害教育を含む障害児教育全体が大きく揺れ動いている。それは特殊教育から特別支援教育への移行である。平成13年1月には「21世紀の特殊教育のあり方について（最終報告）」が、平成15年3月には「今後の特別支援教育の在り方（最終報告）」が報告された。そこには乳児期から成人するまでの教育を継続的に捉え、支援していく必要性が述べられている。今までも個々への指導に力を注いできたが、なお一層の個別的な対応が求められているのである。その中で聴覚障害教育はどう変わっていくのであろうか。実際に現場で聴覚障害児にかかわる教師は、そして聾学校は、何をしなければならないのか。

1部で述べたように、平成14年度はコミュニケーション方法に焦点をあて、本校の卒業生（成人聴覚障害者）およびその保護者に対するアンケート調査を行った。調査の結果から今後の早期教育のコミュニケーションの方向性や在り方を探り、聾学校の課題として環境の準備と整備を導き出した。（第1部IV 全体考察参照）

平成14年度の調査による知見や課題をもとに、平成15年度は、こばと聾学校において新しい取り組み『一緒にあそぼう！』を創設した。その他にもいくつか、平成15年度より成人聴覚障害者の本校教育への支援が始まったが、本論ではこれらの活動のうち卒業生との交流活動『一緒にあそぼう！』を中心に紹介する。手話を自分のことばとしない聴者の教師ができることとして、聴覚障害者にとって大切なことばである手話を自由に使える環境の準備を考えた。この卒業生とのかかわりを通して、本校の幼児や保護者がどのようなコミュニケーションや意識の変化を見せるかを調べ、卒業生の保護者の調査結果と比較、検討した。

この取り組みは、まだ始まったばかりであるが、活動の観察・検討を通して、聴覚障害児が自己実現を図るための支援の手がかりを導き出したい。

II 成人聴覚障害者との活動

1 『一緒にあそぼう！』の取り組み

平成14年度の研究結果を受け、本校幼稚部（3・4・5歳児）幼児・保護者と卒業生のかかわりの機会を設けた。この活動のねらいは、以下のとおりである。

〔子ども〕成人聴覚障害者と話したり遊んだりすることで、聴覚障害者としての自分に気づき、障害を受け入れる素地を培う。

〔保護者〕成人聴覚障害者と関わる活動を共にすることで聴覚障害に対する理解を深め、将来像を見通した子育てに役立てる。

この活動を通して、成人聴覚障害者の存在が、本校の子どもたちには自分のロールモデルとして、保護者には先を見通した子育ての指標として、身近なものとなることを望んでいる。

1) 第1回『一緒にあそぼう！』

〔日時〕	6月7日（土）10：00～11：50
〔場所〕	本校 プレイルーム
〔内容〕	・ お兄さんお姉さんの挨拶と自己紹介（2名） ・ 朝の会（挨拶と歌） ・ ダンス『こんにちは』 ・ 鬼ごっこ ・ じゃんけんゲーム ・ おやつ ・ 終わりの会

初めての取り組みということで、手探り状況で始まった。卒業生とその友人の2名の協力を得て子どもたちとの遊びを展開した。本校教師数名の手伝いもあり、スムーズに活動は進んだ。できるだけ卒業生たちとのかかわりが持てる遊びを考え計画したが、教師主導になってしまった。活動終了後、卒業生たちを交えての反省会では、卒業生の考えが反映された遊びや取り組みが望ましいとの意見が出てきた。

子どもたちは、初めて出会った人なので遠巻きに見ていたが、おやつを食べた後の自由遊びでは徐々にうちとけ、笑顔でかかわっていた。

2) 第2回『一緒にあそぼう!』

〔日時〕	7月26日(土) 10:00~11:50
〔場所〕	本校 中庭
〔内容〕	・ お兄さんお姉さんの挨拶と自己紹介(5名) ・ 朝の会(挨拶と歌) ・ 水遊び ・ ボディペインティング ・ おやつ、 ・ 終わりの会

今回は5名の卒業生の協力を得た。第1回に参加してくれたお兄さんの参加もあり、子どもたちの表情も前回と違い初めから穏やかであった。遊びの内容については、今回も教師が考える形となったが、これは参加してくれる卒業生のメンバーが毎回違うので仕方ないところである。前回の反省を受け、今回はできるだけ卒業生と触れ合える活動を取り入れた。前回よりも子どもたちのかかわりが積極的になり、自分から手話や身振りを使って話しかけている場面が何度も見られた。

おやつを食べる頃からの懇談の時間が、有意義な時間となり始めた。保護者が卒業生に話しかけ、あちらこちらで話の輪が広がっていった。

3) 第3回『一緒にあそぼう!』

〔日時〕	8月23日(土) 10:00~11:50
〔場所〕	本校 中庭
〔内容〕	・ 朝の会(挨拶と歌) ・ プール ・ すいかわり ・ シャボン玉 ・ おやつ ・ 終わりの会

3回目は卒業生の家族4名を招いて『一緒にあそぼう!』を計画したが、急病のため聴覚障害者を交えての活動は実施できなかった。本校の子どもたちだけの活動となった。

4) 第4回『一緒にあそぼう!』

〔日時〕	11月1日(土) 10:00~11:50
〔場所〕	本校 中庭
〔内容〕	・ お兄さんお姉さんの挨拶(5名) ・ 朝の会(挨拶と歌) ・ おもちゃの製作 ・ パズルゲーム ・ おやつ ・ 終わりの会

今回も5名の卒業生の参加を得た。子どもたちの参加が少なかったので、ほぼ1対1でかかわる形となった。回を重ねたことで、自分から積極的に働きかけていく場面が増え、コミュニケーションもスムーズにすすんでいった。いたずらをしかけたり、からかったりとかかわり方も変わってきた。笑顔が絶えないのがうれしい。

今回は父親の参加が多く、父親にも子どもの将来が漠然とではあるが見えたのではないかと考える。子どもだけでなく保護者そして教師も、卒業生からたくさんのことを学んでいる。

2 職員研修と保護者研修

本校初めての試みとして、本年度から職員研修として成人聴覚障害者の話を聞く機会を設けた。今年度は一回の講演会と三回の懇談会を計画した。(懇談会は二回目が終わったところである。三回目は三学期に予定している。)

講演会では、近隣の聾学校の先生(聴覚障害者)をお招きし、子どもへの「絵本の読みきかせ」をしていただいた。その参観のあと、「絵本の読みきかせ」で教師が留意しなくてはならない点など、子どもたちが絵本をもっと好きになるための取り組みについて研修を受けた。先生の手話はもちろんのこと表情や身体全体を使っでの豊かな表現に、学ぶところが数多くあった。子どもたちが目を輝かせ、絵本に見入っている様子を見てみると、手話や口話をどのように取り入れるかという問題ではなく、どのように読み手が絵本の内容を咀嚼し理解するか、そしてそれをどのように表現するかが大切であるとわかった。手話や身振りを有効に活用し、登場人物の心情

に触れさせたりお話の流れをつかませたりすることで、絵本の持つおもしろさを味わわせたいと考えた。職員研修の前には保護者研修も行われたが、ことばを教えるための絵本ではなく、子どもの豊かな心を育てるための絵本ということから、初心に戻って親子で絵本を楽しみたいという保護者からの感想が返ってきた。また先生の豊かな表現力を手本にして、親子で絵本の楽しさを共有したいとの感想がたくさんあった。

懇談会は二回とも本校卒業生を招いての話であったが、自分の受けてきた教育、歩いてきた道を振り返りつつの内容に、送り出した側である教師が知らない面が多いことに愕然とする。例えばクラスの中での孤立感の深さや、自分のまわりにいる教師や友人の存在の大きさなどである。将来を見据えた教育を行うには卒業生の協力が不可欠であると、改めて考えた研修であった。本校で教育を受けてきているので、彼らの考えは本校教師に近いものがあり、逆に「なぜ手話を取り入れるようになったのか。」と問い返す場面も見られた。手話の必要性を認識しつつ、聴覚口話法で小さなステップを積み重ね、根気よくかかわりを続けてくれた母親に感謝しているということばが印象的だった。

三学期には、高齢の聴覚障害者に来ていただき、お話をお聞きする。前回二回とも聴覚口話法での教育を受けた成人聴覚障害者であったので、手話と音声言語を併用した話し合いであった。次回は、まだ補聴器もない時代に教育を受けた聴覚障害者のお話であるので、どのような意見が飛び出すか興味深い。

3 学校評議委員の選任

学校評議委員のメンバーとして、今年度初めて成人聴覚障害者である本校卒業生二人の協力を得ることとなった。学校評議委員とは、学校の教育活動について、幅広く意見を聞き、地域社会からの支援協力を得て、開かれた学校づくりを推進するために置かれるものである。卒業生二人にも本校の子どもたちと同じ聴覚障害者の立場として、意見や要望をいただき、他のメンバーとはまた違う角度からの支援を受けた。

12月までに実施した委員会は二回で、一回目は生活発表会の参観を兼ねて、また二回目は通常の保育場面を参観する形で本校の教育の一端を見ていただいた。卒業生が在籍していた頃と大きく違うのは、手話が使われていることである。子どもたちにとって自由な表現の場となっていることの評価と同時に、手話だけにとらわれるのではなく身振りや表情など身体全体を使った豊かな表現をめざしてほしいとの意見をいただいた。

Ⅲ アンケート調査 「成人聴覚障害者とのかかわりと コミュニケーション」

1 調査の目的

- 1) 本校幼稚部保護者に、成人聴覚障害者とのかかわりについての現状や考えを聞き、今後の取り組みの指標とする。
- 2) 家庭で現在使用しているコミュニケーション方法を尋ね、その実態を明らかにするとともに、その方向性や意義を探る。
- 3) コミュニケーション方法の現状の分析結果から、早期教育におけるコミュニケーション方法のあり方、これからの早期教育の方向性を考察する。

2 調査の方法

〔調査方法〕 アンケート調査

〔調査時期〕 平成15年12月2日

〔調査対象〕 兵庫県立こばと聾学校に在籍する幼稚部幼児の保護者38名

〔調査内容〕 調査は4つの項目から成り立っている。

- 1) 成人聴覚障害者とのかかわりについて
- 2) 『一緒にあそぼう』の取り組みについて
- 3) 家庭でのコミュニケーションについて
- 4) コミュニケーション方法とその意義について

3 回収結果

〔回収率〕

保護者 38通中32通 84%

(1名には兄弟分2通を回答してもらう。)

調査の内容は、本校幼稚部保護者のコミュニケーション方法についての考え方である。調査結果として分析していく部分は次のように組み立てた。今回の調査は本校幼稚部保護者の記述をもとにしながら、本校の卒業生や彼らの保護者の意見も加え、その考え方や捉え方の相違に視点をあてて考察する。特に、「Ⅲ 家庭でのコミュニケーション方法について」は、平成14年度行った調査と結果を比較して、今後の早期コミュニケーションの取り組みを検討する。

以下で、それぞれについて結果の分析と考察を重ねる。選択肢回答は数量化して図で表しその下に筆者の気づきを、記述式回答はアンケートの返答をほぼ原文どおり載せ、その下に筆者の気づきを書き加える。

4 調査結果と気づいたこと

1) 成人聴覚障害者とのかかわりについて

① 保護者と成人聴覚障害者とのかかわり

- 「今までこばと聾学校以外で、成人聴覚障害者と会って話したことはありますか。」「どのような機会に会いましたか。」

〔結果〕

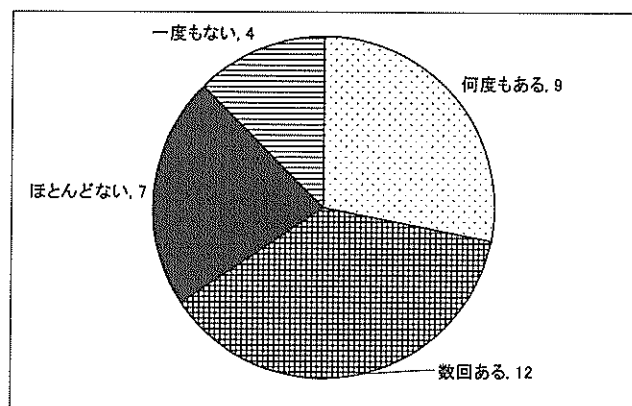


図1 成人聴覚障害者とのかかわり（保護者）

〔気づいたこと〕

- ・28名は何らかの形で成人聴覚障害者と会ったことがある。
- ・9名は聾唖活動や聾のサークルなどを通して、積極的に成人聴覚障害者と会っている。
- ・「一度もない」と答えた4名の保護者のお子さんは、軽度から中等度の聴力である。
- ・手話サークルや手話の講習会などで会っているケー

スが大変多い。

- ・偶然に会って、話しかけたり話しかけられたりしているケースもある。

- 「現在、継続的に成人聴覚障害者と活動を共にされていますか。」（複数回答、可）

〔結果〕

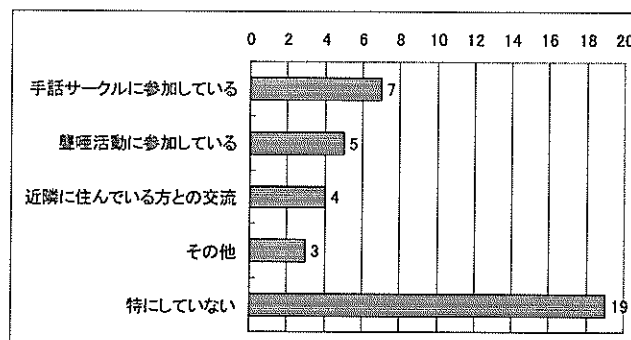


図2 成人聴覚障害者とのかかわり・現在（保護者）

〔気づいたこと〕

- ・9名が、現在も意欲的に成人聴覚障害者と交流している。
- ・交流したい気持ちは持っているが、時間的なことや環境などから半数以上の者（19名）が、かかわりを持っていない。
- ・積極的に交流を求める人は、いろいろな活動に参加している。

② 在校生と成人聴覚障害者とのかかわり

- 「今までこばと聾学校以外で成人聴覚障害者に会って話したことはありますか。」「どのような機会に会いましたか。」

〔結果〕

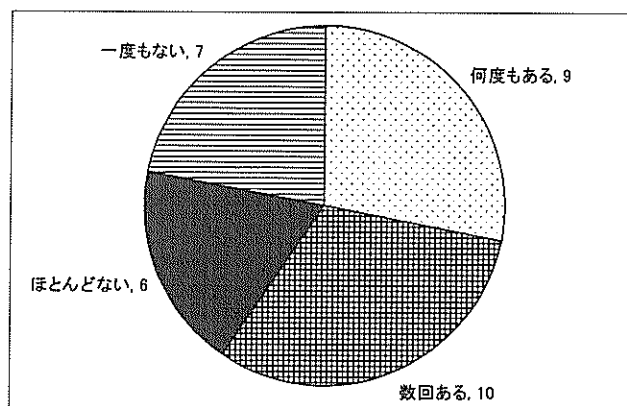


図3 成人聴覚障害者とのかかわり（在校生）

〔気づいたこと〕

- ・保護者の項目とほぼ同様の結果が出ている。
- ・何度も会ったことがあると答えた9名は、保護者と一致する。
- ・9名は手話の講習会や聾者のサークル、聴覚障害児の親の会行事（クリスマス会、キャンプ）など、さまざまな活動に参加している。
- ・7名の子どもが「一度も成人聴覚障害者に会ったことがない」と答えている。「一度もない」と答えた4名の保護者の子どもを含む。

●「現在、お子さんが成人聴覚障害者に関わる機会を意識的に作っていますか。」（複数回答、可）

〔結果〕

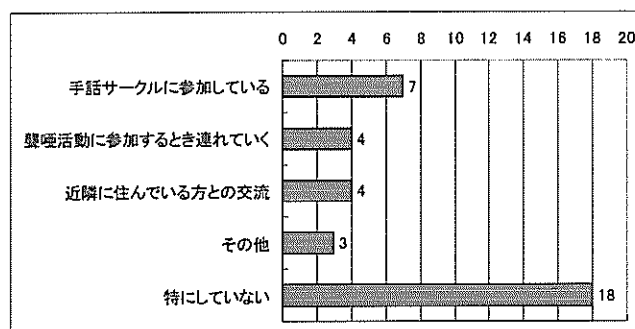


図4 成人聴覚障害者とのかかわり・現在（在校生）

〔気づいたこと〕

- ・8名が継続的に子どもにも成人聴覚障害者との交流の場を作っている。
- ・半数以上の者（18名）が、成人聴覚障害者と子どものかかわりを持てていない。
- ・積極的に交流を求める保護者は、いろいろな活動に子どもを連れて参加している。

2) 『一緒にあそぼう!』の取り組みについて

今年5月から始めた『一緒にあそぼう!』に参加したのは、38名中15名と本校幼稚部在籍幼児の半数弱であった。5月、7月、8月、11月と『一緒にあそぼう!』の活動を4回行うことが出来た。土曜日の活動であったので、家族で参加したり、母親に代わって父親が連れてきたりするケースも多かった。しかし、家族の大事な時間であるお休みの日であること、また遠距離通学をしていることなどの理由か

ら参加できない者も多かった。「予定があわなかった」が不参加の一番の理由であった。

今回は参加した15名の保護者の感想と子どもの様子や変化は以下のとおりである。

- 「『一緒にあそぼう!』でのかかわりを通して、お子さんの表現や表出などで何か変わったことがありますか。」

〔結果〕

子どもの変化（回答15名）

- ・伝える方法を自分なりに考えていた
- ・指文字を使ったり、手話を使ったりして、通じ合えることがうれしい様子だった
- ・ことばよりも指差しや、手を引いて身振りなどで伝えようとしている様子が見られた
- ・はじめは恥ずかしがっていたが、慣れてくると自分からいろいろ話をしていった
- ・「〇〇さんは来る？」と次の機会を楽しみにしていた
- ・相手が手話や身振りで表現するのを見て、ほとんどことばを発していなかったが、回を重ねるごとにうちとけていった
- ・子どもがとても喜んでいった
- ・一緒に遊んでくれて楽しそうだった
- ・初対面の人に対しても自分の思っていることを言えるようになった（「またあそぼうね」など）

〔気づいたこと〕

- ・子どもたちがかかわりの中で、コミュニケーションの方法を学んでいる。
- ・通じ合う楽しさを味わっている。
- ・何度か機会を作ったことで、かかわり方が変化してきている。

- 「『一緒にあそぼう!』でのかかわりを通して、あなたの考えや行動で変わったことがありますか。」

〔結果〕

保護者の変化（回答15名）

- ・手話が子どもにとって大切だということがわかった
- ・子どもが聴覚障害を持っていることを自然に受け入れるためにも、いろいろな人とかかわりたいので、よい機会となった
- ・常に手話をもっと勉強したいと思っていたので、改めて勉強不足が身にしみた

- ・子どものためにも、もっとかかわる機会がほしい
- ・話を聞くことで、刺激を受けることがあった
- ・自分が手話を使っていないので、成人聴覚障害者と話することに消極的になってしまう
- ・手話に自信がないため話をするのに抵抗を感じていたが、手話でなくても身振りや指文字などなんとでもコミュニケーションがとれるので、まずは話をしてみようと思うようになった
- ・仕事先の聴覚障害者の方に自分から話しかけ、かかわりが持てるようになった

〔気づいたこと〕

- ・手話の大切さを感じ取っている。
- ・自分の手話の表現力の無さを感じている。
- ・手話ができないことによる成人聴覚障害者へのかかわりの抵抗感が薄れている。
- ・成人聴覚障害者に話しかけてみようという思いが生まれている。
- ・障害認識という点で、今後の活動を通してその捉え方の変化が予測できる。

3) 家庭でのコミュニケーション方法

ここでは、平成14年度の卒業生の保護者への調査結果（本論文 第1部 Ⅲ 家庭でのコミュニケーション方法）と比較して、検討する。

家庭での主なコミュニケーション方法

〔結果〕

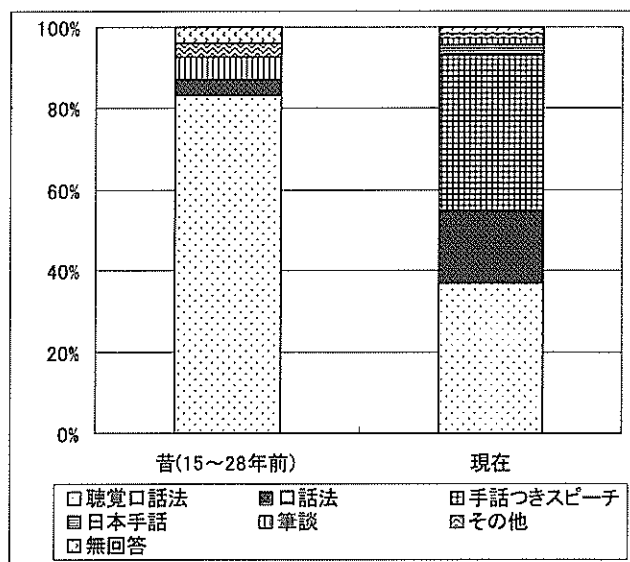


図5 家庭でのコミュニケーション方法
ー卒業生の在校時と現在ー

〔気づいたこと〕

- ・在校生の家庭では、聴覚口話法、手話付きスピーチ（日本語対応手話）、指文字などさまざまなコミュニケーション方法が使われている。
- ・現在は聴覚口話法が約40%、手話つきスピーチが約40%の結果となっているが、これは延べ数で、ほとんどの家庭で両方の方法を使っている。
- ・卒業生が本校に在籍していた頃はほとんどが聴覚口話法のみで、在校生の家庭とは全く違う結果が出ている。
- ・その頃卒業生の家庭では、手話は全く使われていない。学校で手話を使うことを否定していた時代である。

〔結果〕

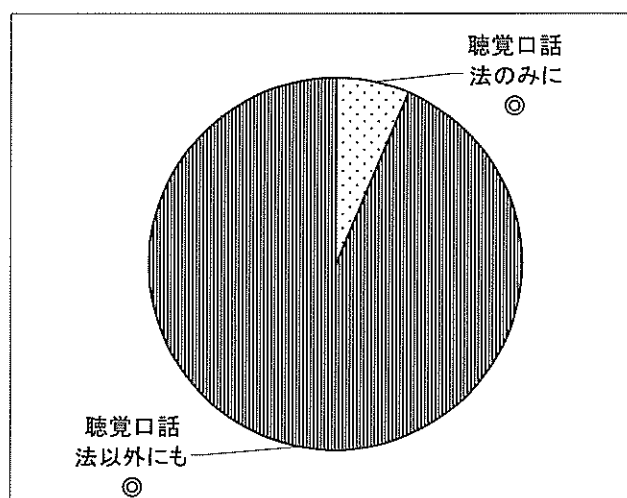


図6 在校生の家庭でのコミュニケーション

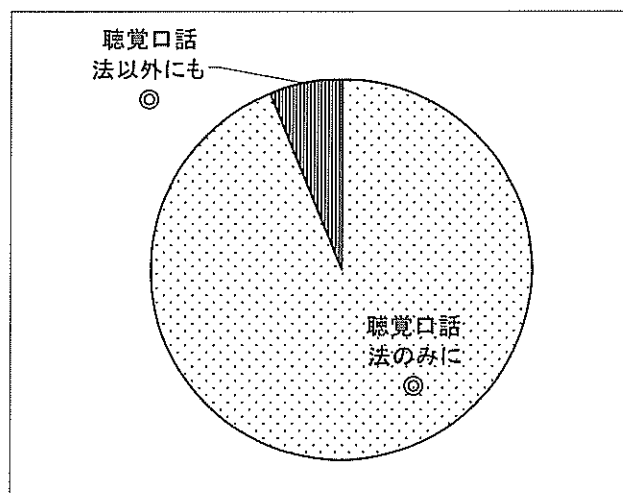


図7 卒業生（成人聴覚障害者）の家庭での
コミュニケーションー在校時ー

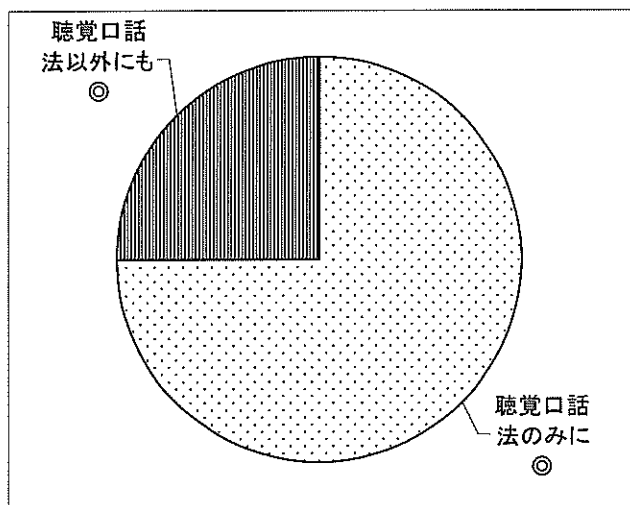


図8 卒業生（成人聴覚障害者）の家庭でのコミュニケーション－現在－

〔気づいたこと〕

- ・在校生の家庭で聴覚口話法のみでコミュニケーションをとっているのは、32名中2名の家庭だけである。
- ・ほとんどの家庭で、聴覚口話法に加え手話も取り入れ使用している。
- ・卒業生が本校に在籍していた頃は、ほとんどの家庭で聴覚口話法のみでコミュニケーションが行われていた（48名中45名）。
- ・子どもが小さいときの家庭でのコミュニケーションを比較すると、正反対の結果が出ている。（図6と図7）
- ・卒業生の多くの家庭では、今も聴覚口話法のみでコミュニケーションをとっている（48名中36名）。現在も家庭での中心的なコミュニケーションは聴覚口話法であるとわかった。

聴覚口話法のみを使っている人からの回答（2名）

（①から③の項目の限り、対象が2名と少ないので筆者の気づきの中に回答も加え表記する。回答は「 」内に記す。）

① 聴覚口話法のみを使用する理由

- 「聴覚口話法のみを使用する理由は何ですか。」（複数回答、可）

〔結果と気づいたこと〕

- ・「子どもが他の方法を使わない」という理由が挙げられている。

- ・聴覚口話法が親子、家族にとって自然な方法で、「意思疎通に支障がない」と受けとめている。
- ・両名とも子どもが軽度から中等度の難聴で、聴覚優位のコミュニケーションを行っている。

② 会話の頻度と内容・理解度

- 「あなたはお子さんとよく話をしますか。」「どのような話をしますか。」（複数回答、可）

〔結果と気づいたこと〕

- ・聴覚口話法のみを使用であっても、「一日に何度も話をする（2名とも）」とよく話をしていることがわかる。
- ・話の内容ではどちらの返答も複数回答である。「家族・学校・友だち・遊び・自然・身近な出来事」などの様々なジャンルにわたって話をしている。身近な出来事や雑談など日常的な話を家庭で交わしている様子が伺える。

- 「あなたはお子さんの言っていることを理解していると思いますか。」

〔結果と気づいたこと〕

- ・話し合いの内容については、一人は「すべて理解している」もう一人は「だいたい理解している」と答え、何でも話し合え、内容もわかりあえていると考えている。

③ 聴覚口話法以外の使用について

- 「家庭で聴覚口話法以外の方法を使おうと思ったことはありますか。」

〔結果と気づいたこと〕

- ・どちらからも「ある」との回答が寄せられた。使いたい方法としては「手話付きスピーチ（日本語対応手話）」である。これは次の項目の聴覚口話法使用の不便な点と密接に関わっている。

④ 聴覚口話法の利点と不便な点

- 「聴覚口話法を使っていて良いと思われる点はどこですか。」

「聴覚口話法が使いにくいと思った場面や状況はありますか。」

〔結果〕

便利な点

- ・ 耳を使うことが自然である
- ・ 耳は今はしか使えない

不便な点

- ・ 遠くに離れているとき
- ・ 口の形だけではわからないとき
- ・ 野外で遊んでいるとき
- ・ 友だちと大勢で遊んでいるとき

〔気づいたこと〕

- ・ 便利な点というよりも、保護者の聴覚口話法に対する考えが述べられている。保有する聴力を使わせたいとの思いである。また聴覚障害児を育てた先輩保護者の意見を聞き参考にしている面もある。
- ・ 不便な点では、やはり物理的な要因が多い。昨年度行った調査からも、「暗いところ」「にぎやかなところ」など環境によって口形の読み取りや聞き取りが難しくなることがあげられていた。

聴覚口話法以外の方法も使っている人からの回答

(30名)

① 聴覚口話法以外の方法とその方法を使用する理由

- 「聴覚口話法以外で特によく使っているコミュニケーション方法は何ですか。」

〔結果〕

手話つきスピーチ	26
日本手話	2
その他	1 (スキンシップ)
無回答	2

〔気づいたこと〕

- ・ 手話つきスピーチのみを使い、聴覚口話法・口話法どちらも使っていない者は1名である。
- ・ 聴覚口話法を主として使っている者は30名中8名、その他はどちらが主という形ではなく、いろいろな方法を使っている。
- 「なぜ聴覚口話法以外のコミュニケーション方法を使うようになったのですか。」(複数回答、可)

〔結果〕

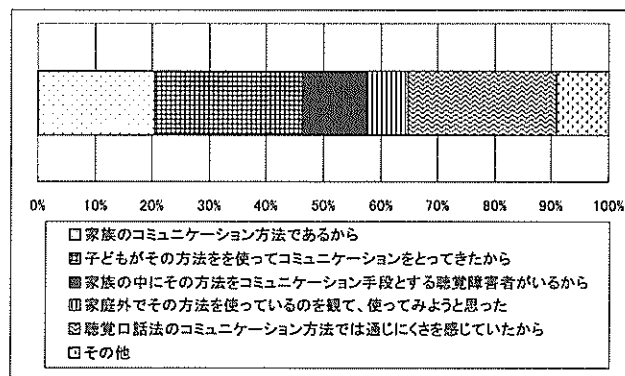


図9 聴覚障害者以外も使用する理由

〔気づいたこと〕

- ・ 子どもから手話を使ってきたケース30名中14名である。
- ・ 「家族のコミュニケーション方法である」と子どもの身近で、手話を使うことが自然なこととなっている。(30名中11名)
- ・ 学校内の聴覚障害者の親子の影響も大きい。
- ・ 聴覚口話法でのコミュニケーションの通じにくさや難しさから、他の方法を使うようになる。(14名)
- ・ 「子どもにあった方法である」など、家族のコミュニケーション方法として、手話を肯定的に捉えている結果が出ている。
- ・ 子どもによりわかりやすく伝えるには、手話が有効であると考えている。

② 会話の頻度と内容・理解度

- 「あなたはお子さんとよく話をしますか。」

〔結果〕

一日中絶え間なく話をしている	7
一日に何度も話をしている	20
用のある時だけ話をする	3
ほとんど話をしない	0

〔気づいたこと〕

- ・ ほとんどの家庭で「一日に何度も」「一日中絶え間なく」話をしている。(30名中27名)
- ・ これは聴覚口話法のみを使っている家庭でも同じ結果で、どんな方法を使っている子どもとのコミュニケーションを大事にしているということがわかる。

●「どのような話をしますか。」(複数回答、可)

[結果]

家族のことについて	27
学校のことについて	28
友だちのことについて	27
あそびについて	26
自然について	23
身近な出来事について	28
その他	5

[気づいたこと]

- ・30名ほとんどの者が複数回答で、提示した回答すべての項目に○をつけている。
- ・様々な内容について、親子で話をしている。
- ・身近に起こった出来事について何でも、子どもと話をしていることがわかる。

●「あなたはお子さんの言っていることを理解していると思いますか。」

[結果]

すべて理解している	7
だいたい理解している	20
半分くらい理解している	0
少しだけ理解している	0
ほとんど理解していない	0
無回答	3

[気づいたこと]

- ・ほとんどの保護者が、子どもの話の内容や言いたいことは「すべて理解している」「だいたい理解している」と答えている。(30名中27名)
- ・聴覚口話法のみを使っている2名と同様、子どもの言いたいことを理解できていると考えている。

③ 手話の利点と不便な点

●「手話を使っていて使っていて良いと思われる点はどんなところですか。」「手話が使いにくいと思った場面や状況はありますか。」

[結果]

便利な点

方法としてのよさ

- ・遠くからでも読み取れる
- ・補聴器をしていなくても話せる
- ・プールや風呂など補聴器をつけられないところでも伝え合える

- ・ことばを聞き取れないときに通じ合うことができる

人との関係でのよさ

- ・自分の思いを伝えることができる
- ・口話法だけでは伝わらない細かな部分も伝えることができる
- ・自分の話を正確に伝えることができる
- ・相手の話を取り違えることが少ない(2)
- ・子どもが話を理解しやすい
- ・子どもと深い話ができる
- ・話がスムーズになった
- ・口話だけよりもお互いの言っていることが理解できる(6)

方法がもたらす効果

- ・初めてのことばや抽象的なことばが覚えやすい
- ・口話法では伝えきれない、理解できないところが補える(2)
- ・不明瞭な発音を補うことができる
- ・迅速に伝わる(2)
- ・気持ちが通じ合う楽しさを共感できる(2)
- ・子どもが生き生きしている
- ・子どもが伝わらなくていらいらすることが減った
- ・互いに納得できる
- ・話やことばの意味を理解しやすい
- ・そのことばを知らなくてもイメージできる
- ・子どもがイメージしやすい
- ・聴覚障害者とコミュニケーションできる

不便な点

- ・聴者の中では通用しない
- ・相手がわからなかったら通じない
- ・小学校へ行ったときに困る
- ・親の手話力不足のため、子どもとのより良いコミュニケーションとなっていない
- ・家族の中で手話が理解できなくて困る
- ・知らない手話だと理解できない
- ・手話を知らない人に対しては発話するが、通じにくく簡単な会話で終わってしまう

[気づいたこと]

- ・手話使用の便利な点のひとつとして、環境の要因をあげている。聴覚口話法では不利となる雑音のあるところや、補聴器をつけられない場所での使用が可能という利点がある。
- ・人との関係の中での利点は数多い。正確に、細かな部分まで、伝えることができる。また理解することもできる。
- ・伝え合うこと、通じ合うというように親子双方に

とってのよさがある。

- ・理解しあえることによる気持ちの安定や喜びが生まれてくる。
- ・抽象的なものやことばのイメージが容易にできるという点も挙げられている。
- ・不便な点は、一番身近な問題である小学校のことが挙げられている。聴者の中では通じない、通用しないという社会の現状に反映した理由である。
- ・全体的に見ると、便利な点が数多く挙げられ、不便な点は7人から挙げられたのみであった。手話の良さをほとんどの保護者が感じ取っている。

④ 家庭での聴覚口話法の使用状況

- 「聴覚口話法以外のコミュニケーション方法を使うことによって、お子さんと家族の家庭での聴覚口話法の使用状況はどう変化しましたか。」(複数回答、可)

〔結果〕

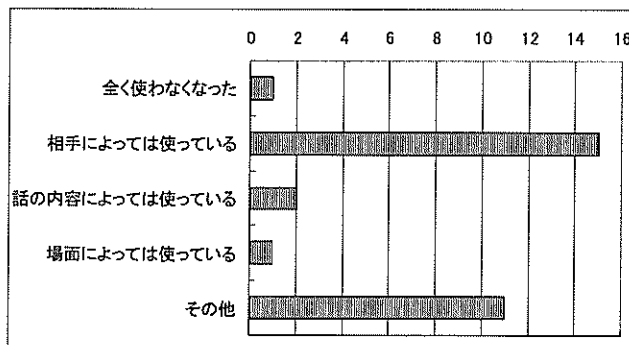


図10 家庭での聴覚口話法の使用状況

- ・聴覚口話法を全く使わなくなった者は、32名中1名である。
- ・相手によって使っている者は15名と半数で、父、母、兄弟、祖父母などに使っている。
- ・相手によって使っている者15名では、相手が手話をわからないので聴覚口話法(音声言語)を使うというのが、一番の理由である。(7名)
- ・また逆に相手が手話をつけなくてもわかってくれるという理由も多かった。よく話をしている家族なので、少々発音が不明瞭でもわかってもらえるということである。(15名中4名)
- ・話の内容によって聴覚口話法を使っているのは、簡単な話のときである。(1名)

- ・その他の11名は手話も使うが、今までと変わらず主として聴覚口話法を家族の間で使っている。

4) コミュニケーション方法とその意義について

ここでも、平成14年度の卒業生の保護者への調査結果(本論文 第1部 IV コミュニケーション方法とその意義について)と比較して、検討する。

① 家庭で使いたいコミュニケーション方法と理由

- 「今後お子さんと話す時に使いたいコミュニケーション方法は何ですか。」(複数回答、可)

〔結果〕

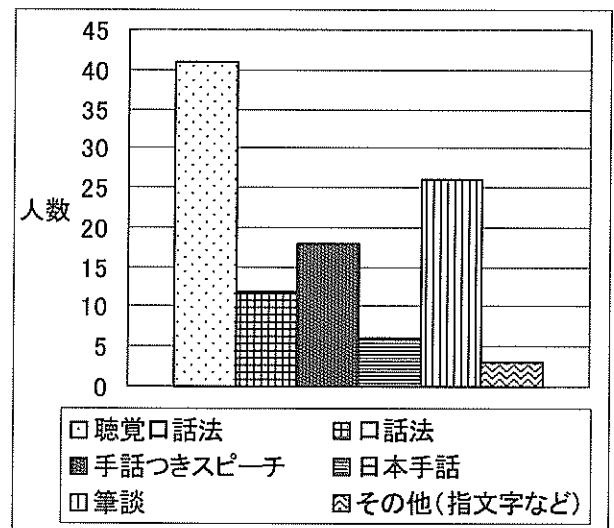


図11 家庭で使いたいコミュニケーション方法
—卒業生(成人聴覚障害者)の保護者—

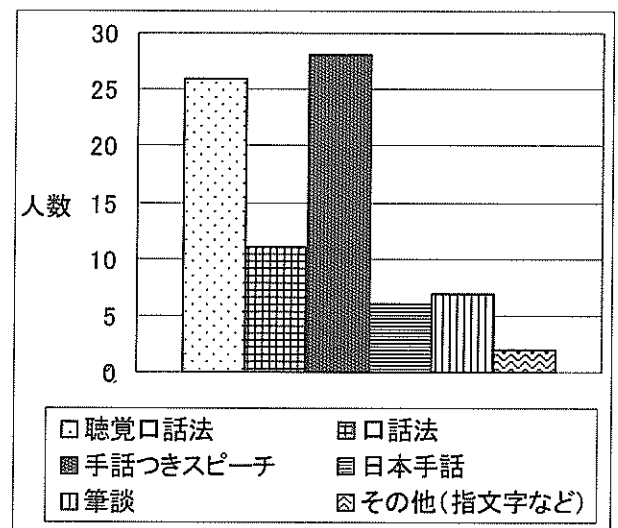


図12 家庭で使いたいコミュニケーション方法
—在校生の保護者—

〔気づいたこと〕

- ・家庭で使いたいコミュニケーションで、卒業生の保護者と在校生の保護者では、手話使用に大きな違いがある。
- ・手話を子どもとのコミュニケーションで使っている在校生の保護者は、今と同じように今後も手話を積極的に使っていきたいと考えている。
- ・在校生の保護者では、聴覚口話法よりも若干ではあるが、手話つきスピーチの使用の方が多い。
- ・卒業生の保護者は、手話も大事だが伝え合うためには筆談が必要と考えている。これは自身が手話を使うことができないことにも反映している。

〔結果〕

いろいろな方法 (22名)

聴者の世界

- ・聴者の社会の中でしっかり生きていってほしい
- ・手話も大事、社会の多くの人と関わるには口話も必要
- ・たくさんの方・手段を持っていると、今後生きていくうえで力になる
- ・言語・語彙数を増やして、聴者の会話も理解してほしい
- ・今の社会の現状からは「筆談」も重要

聾者の世界

- ・聾や難聴の方とかかわりも大事にしてほしい
- ・難聴者と手話を使ってコミュニケーションをとってほしい
- ・バイリンガルに育てたい
- ・手話と口話、両方使えるようになってほしい

人との関係の中で

- ・いろいろな方法を使って伝えたい
- ・いろいろな手段を使って通じ合いたい
- ・コミュニケーションを大切にしたい
- ・どんな方法を使ってでもコミュニケーションしたい
- ・スムーズにコミュニケーションをとりたい
- ・子どもの気持ちをわかりたい、私の気持ちをわかってほしい
- ・会話が伝わりあい、人とのコミュニケーションがとれる
- ・子どもの言いたいことや思っていることをしっかりと理解してあげたい

子どもの立場に立って

- ・子どもが理解しやすい方法である
- ・自分自身に自信を持って生きてほしい
- ・子どもが自分の気持ちをうまく伝えてほしい
- ・子どもにとって一番良い方法だから

口話の補助として

- ・口話でわからないところを補える (2)
- ・日本語をしっかり入れていきたい
- ・口話だけではわかりにくいことが、手話を入れるとスムーズに話ができる
- ・環境によって口話が使えないときの補助になる

聴覚口話法・口話のみ (3名)

- ・しっかり耳を使っていきたい
- ・人工内耳を活用するためには、聞く力をつけたい
- ・社会でやっていけるようになってほしい

手話のみ (4名)

- ・聴者との付き合いが大変。理解を求めるためにも手話を使っていきたい
- ・子どもが一番理解し、使い慣れている方法である

〔気づいたこと〕

- ・家庭でのコミュニケーションとして、多くの保護者がひとつの方法にこだわるのではなく、いろいろな方法を使えるようになってほしいと思っている。(32名中22名)
- ・子どもとのコミュニケーションで聴覚口話法を使いたいと思っている3名は、人工内耳や中等度難聴のお子さんの保護者である。
- ・手話を子どもとのコミュニケーションに使いたいと答えた4名は、聴覚口話法も使うが子どもの気持ちを受けとめ理解するには手話を使うことが必要だと考えている。
- ・無記入は3名であった。

以下は「いろいろな方法を使っていきたい」と答えた22名の保護者に対しての筆者の気づきである。

〔気づいたこと〕

- ・聾者や難聴者とかかわりを大事にしたいと考えている。
- ・聴者の世界を意識した意見も多く、口話の力をつけることも望んでいる。
- ・わかり合う、通じ合うなどコミュニケーションを大切に考えている。
- ・子どもの立場にたって、子どもが自信を持って生きていくためのより良い方法を考えている。

② 社会で有効なコミュニケーション方法と理由

- 「今後、職場や地域などで生きていくために有効なコミュニケーション方法は何かと思いますか。」
(複数回答、可)

[結果]

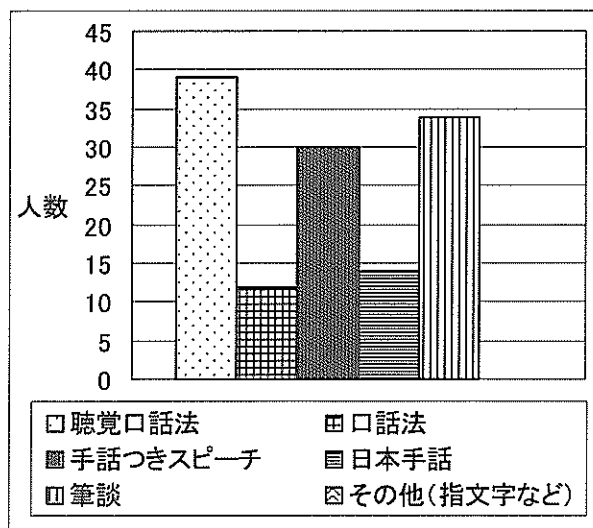


図13 社会で有効なコミュニケーション方法
—卒業生（成人聴覚障害者）の保護者—

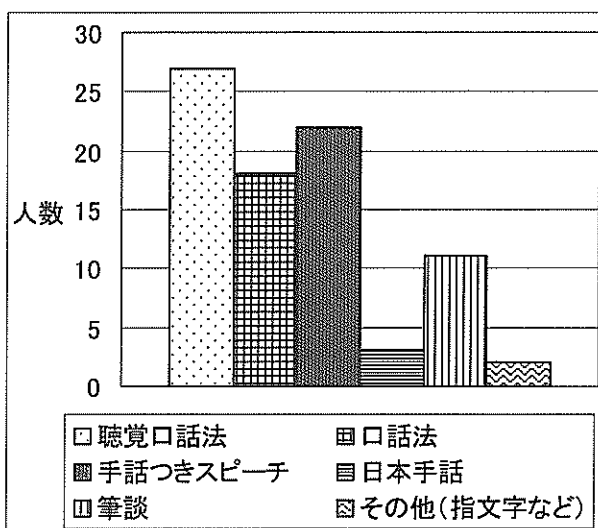


図14 社会で有効なコミュニケーション方法
—在校生の保護者—

[気づいたこと]

- ・社会で有効と考えるコミュニケーションでは、卒業生の保護者と在校生の保護者両方ともが、いろいろな方法を使って生きていってほしいと考えている。
- ・卒業生の保護者は、手話も大事だが正確に伝え合うためには筆談が必要と考えている。これは家庭で使いたいコミュニケーション方法の結果と同じ

で、手話が浸透してきたとはいえ、まだ手話を使う人が少ない社会の現状を反映している。

- ・在校生の保護者で筆談と書いているものが少ないのは、まだ幼児段階で筆談というものに実際触れていない理由からと考える。

[結果]

いろいろな方法 (21名)

- ・「聴者との間違いのないコミュニケーションの方法」との視点では筆談がより良い方法
- ・聴力低下もありうるので、手話にも慣れさせたい
- ・口話も大事、手話も細かい部分を伝える力になる
- ・正確に伝えることができる (4)
- ・通じ合うことで会話の楽しさを味わえる (4)
- ・社会に出たときにできるだけ多くの人とコミュニケーションをとれるようになってほしい
- ・本人が楽しんでコミュニケーションをしてほしい
- ・相手と通じ合える努力をするためには、ひとつでも多いコミュニケーション方法があったほうが良い
- ・伝えたいことを話せる、相手の話を理解できる、通じ合える
- ・お互いに分かり合える
- ・話す相手の方法に合わせて話ができる
- ・いろいろな人に会い、その人にあったコミュニケーションをとれるようになってほしい
- ・世間は厳しい、聞こえないことで甘えてほしくない
- ・相手によって使い分けることができれば、いろいろな人と会話を楽しめる
- ・聴者の社会の中でもしっかり生きていってほしい
- ・手話ができれば自分自身にもっと自信を持ことができる
- ・同じ聾や難聴の方とのかかわりを大事にしてほしい
- ・聴覚口話法だけで無理があるときは、本人がわかりやすい、通じやすいコミュニケーションの方法をとって生きていってほしい
- ・本人が理解できること、周囲が伝えやすいこと、両方が大切
- ・手話をわからない人でも内容を伝えることができる
- ・正確に伝えるためには、いろいろな手段を使って伝えたらよい
- ・そのとき、その場にあわせて使ってほしい
- ・手話ができる人ばかりではない (2)

- ・相手の言っていることを理解し自分の気持ちを伝えなければ会話は成り立たない
- ・日本語をきっちり入れるため
- ・聴覚障害者として生きていくためには手話は必要

聴覚口話法・口話法のみ（8名）

- ・周りは手話を使わない
- ・手話ができる人は少ない
- ・一般の人は音声がないと通じ合うことが難しい
- ・会話を楽しめる
- ・進学先や社会では、相手が何を言っているか、口話法を身につけることが必要
- ・ある程度話せることが、聴者との間では重要

手話のみ（1名）

〔気づいたこと〕

- ・様々なコミュニケーションを相手や場所によって使い分けることが、社会で生きていくために必要であるという考えの保護者が多い。（32名中21名）
- ・家庭で使いたいコミュニケーションと大きく異なるのは、手話のみと答えたものが1名しかいないことである。
- ・社会で有効なコミュニケーションが聴覚口話法のみと答えた保護者が多い。聴者の世界を強く意識した答えが返ってきている。

③ 今後の取り組みについての要望

- 「現在、学校評議委員や保護者研修など成人聴覚障害者に本校教育への協力をお願いしています。今後、子どもたちにどのような教育活動を望みますか。」

〔結果〕

- ・今後も成人聴覚障害者との活動を続けてほしい
- ・自分らしく生きていってほしい、そのためにも幼いときからどちらの交流（聴覚障害者、聴者）も大事にしてほしい
- ・成人聴覚障害者とのかかわりは、将来的な見通しを持てて良い勉強になった
- ・成人聴覚障害者から、昔の話や自分の経験などを聞いて子どもたちの参考になると良い
- ・今は昔とはずいぶん変わったが、まだ「手話が大切」ということがわかっていない（聴覚障害児の保護者であっても）

- ・仕事をしている成人聴覚障害者の話を聞かせ、その働いている姿を見せてあげたい
- ・成人聴覚障害者とかかわることで、自分にもできる、できるかもしれないという気持ちを持続してほしい
- ・『一緒にあそぼう！』のように遊びの中で、親がかかわらず、自分でコミュニケーションをとる力をつける活動が良い
- ・中等度難聴の方とかかわる機会を持ち、社会での苦労や努力されたことを聞きたい

〔気づいたこと〕

- ・子どもにとっても、保護者にとっても今年度行った活動は、おおむね好評であった。
- ・成人聴覚障害者とのさまざまな活動を望んでいることがわかる。
- ・成人聴覚障害者とのかかわりによってもたされたもの、また今後もたらされるであろうと期待するものが大変多いということがわかる。

5 ま と め

1) 成人聴覚障害者とのかかわり

保護者も子どもも半数以上が、成人聴覚障害者とのかかわりを持ったことがあるとの結果が出た。特に多かったのは、手話の講習会やサークル、聾活動などへの参加である。こばと聾学校以外の場で「一度も会ったことがない」と答えたのは保護者4名、子ども7名で少数であった。卒業生が在籍していた頃は、手話使用は全く行われず、筆者自身、保護者から聴覚障害者との交流の話をほとんど聞かなかったことを考えると、ずいぶん変わったというのが筆者のこの結果に対する印象である。ただ現在も継続的に成人聴覚障害者に会っているかということ、一部を除いて「現在は特に何もしていない」との回答が32名中19名と半数以上になる。時間がないこと、また子育てなどで余裕がなく、気持ちはあっても実際には聴覚障害者とのかかわりが持てていない実態が見えてきた。

2) コミュニケーション方法の捉え方の変化

アンケート全体を見ると、昔と今でコミュニケーション方法、特に手話の捉え方が大きく変わったこ

とがわかる。在校生では、9割以上が家庭でのコミュニケーション方法として聴覚口話法と手話を併用しているのである。卒業生が本校に在籍していた頃は、9割以上の家庭が手話を使わず聴覚口話法のみでのコミュニケーションであったという、全く逆の結果が見られた。これは予想し得たことで、7年ほど前から本校で手話使用が始まったことからの結果である。本校教師側の変化つまりは手話使用が、母親の手話使用への抵抗感を少なくしたのである。教師の取り組みが、常に保護者に大きな影響を与えている。いつの時代もより良い親子関係が基盤にあり、その上でコミュニケーション意欲を高めるための取り組みが行われてきた。在校生の保護者のほとんどが、子どもの言いたいことを「理解している」と答えている。今は日常的な出来事であり、母親が保育を参観する本校ではほとんどの時間を母子で過ごしているため、子どもの考えていることは予想しやすい。子どもが成長して、行動範囲が広がり考えも深まったとき、通じ合うコミュニケーション方法を持っておくことが必要なのである。その下地として本校の手話を取り入れるという取り組みは、今後の親子関係や人間関係に大きな影響を与えると予測できる。

在校生の保護者から、聴覚口話法と手話どちらも相手や状況に応じて使えるようになってほしいと、卒業生の保護者と全く同じ意見が返ってきた。聴覚障害者とも聴者とも、通じ合い分かり合えるコミュニケーションを望んでいるのである。それに対応するためには、教師や保護者など大人が様々なコミュニケーション方法に精通していることが必要となってくる。

IV 全体考察

1 卒業生に教えられたこと

『一緒にあそぼう！』の活動を通して、子どもたちのかかわりの変化という点でも成果は見られたが、何より良かったのは保護者の意識の変化である。子どもが卒業生とかかわっている様子を客観的に観察することで、自分の子どもにとって必要なことが明確になっていった。特に子どもにとっての手話の大

切さと、子ども自身が自分に聴覚障害があると受けとめる障害認識という点である。

「成人聴覚障害者と話したり遊んだりすることで、聴覚障害者としての自分に気付き、障害を受け入れる素地を培う」ことを、この活動の子ども側のねらいとした。「まだ聴覚障害を認識していない子どもであるが、手話で話をする方にかかわり、回数を重ねていくことでいろいろなことに気づいていくと思う。」という母親の感想にあるように、成人聴覚障害者にかかわることで自分自身の障害を個々の発達に応じて受け入れていくのではないかと考える。障害認識の面で、成人聴覚障害者との活動は大きな意味を有している。

保護者側のねらいとして「成人聴覚障害者と関わり活動を共にすることで聴覚障害に対する理解を深め、将来像を見通した子育てに役立てる。」ということ掲げた。毎回の活動終了後には、保護者と卒業生が談笑している場面が見られた。彼らと話をすることで、彼らの考えや生き様に触れ、多くのことを吸収したのではないかと考える。「成人の方の姿を見て子どもの成長を夢見ることができた。」「社会で一生懸命がんばっている先輩方のように明るく元気に育ってほしい。」「成人聴覚障害者の話が実体験として聞けるのがよい。」という感想からも、今回の『一緒に遊ぼう！』の取り組みが、将来を見据えた子育てに役立つことが、はっきりと示された。土曜日の活動であったので、参加は本校幼稚部在校生の半数に満たなかった。参加人数は少なかったが、かえって土曜日で良かったのは、父親の参加が可能となった点である。父親の感想のひとつに「手話でなくても身振りや指文字などなんでもコミュニケーションがとれるので、まずは話をしてみようと思うようになった。」とある。保護者や教師を含め大人は、手話が出来ないことが聴覚障害者とのコミュニケーションの壁と考えがちである。そうではないということを、卒業生と子どもたちが教えてくれた。遊びの中で楽しさを共有し、その気持ちを伝えたい、もっと楽しみたいという思いがあれば、ことばは要らないのである。子どもたちを見ていると、身振り、表情、身体全体などいろいろな方法を使って働きか

けていた。子どもだけでなく、保護者も聴覚障害者の中に入って、まずは一歩踏み出すことができたのではないかと考える。

協力してくれた卒業生からは、保護者との話は有意義な時間となったが、今度は自分たちから在校生の保護者に考えを聞きたいとの要望が出ている。在校生の保護者がどのような考えで子育てをしているのかを知った上で、自分たちの父母では為しえなかった役割を担ってほしいと考えているのである。まだその機会は持っていないが、今後の取り組みのひとつとして計画したいと考えている。更にこの活動をすすめて、成人聴覚障害者とのネットワークやつながりを深めていきたい。

2 卒業生からの支援・本校卒業後の支援

『一緒にあそぼう！』の活動で卒業生に協力を求めると、彼らは自分の生きてきた道を振り返りながら、後に続く後輩のためになるならと快く引き受けた。彼らと共に活動することで、支援というものを改めて考えさせられることとなった。二つの支援、卒業生からの支援と本校卒業後の支援である。卒業生からの支援は、同じ聴覚障害がある仲間だからこそ見えてくる、彼らだからこそ出来る支援である。卒業生を含めた成人聴覚障害者の支援の場を作っていくことが、教師に課されている役目だと考える。今回行った『一緒にあそぼう！』はその手始めであり、卒業生とのパイプ役として教師としてできる支援のひとつとして計画した。両者が力をあわせて支援してこそ、聴覚障害児の成長に寄与するものが大きいと思える手ごたえを感じた。

もうひとつ、卒業後の支援の必要性を教えてくれたのも、卒業生である。卒業したら終わりではない。本校の卒業生は卒業と同時に、それぞれ地域の小学校へ就学していく。校内に聴覚障害児は一人だけという状況が続く場合も多い。今回、活動を手伝ってくれた卒業生たちと話をしている、彼らも聴者の集

団の中の一人として助けの手を求めているということがわかった。一人悩んで苦しんだからこそ、この活動に賛同し協力してくれたのである。鳥越⁽¹⁵⁾が「手話を共有するろう者のネットワークを通して、情報を伝え合ったり相互に助け合う」こと、また「ろう者社会の役割は大きい」と述べているように、幼児にとっても早い時期にろう者社会との接点を作る必要を感じている。卒業生や成人聴覚障害者は後輩たちが悩んだり迷ったりしたとき、仲間として支えてくれるであろう。

3 早期のコミュニケーション

「成人へのつながりを考えた早期のコミュニケーション」と「聴覚障害児それぞれに適したコミュニケーション」のふたつを、昨年度の研究の課題と考えていた。それは今も変わっていない。「ろう児がろう児と出会う場が保障され、さらにろうの先輩が身近にいることが重要」と武居⁽¹⁶⁾が述べているが、本校ではろうの先輩が身近にいる環境ではない。成人へのつながりを考えた「早期のコミュニケーション」であるためには、自分の将来像となるロールモデルが必要なのである。『一緒にあそぼう！』の取り組みは、その本校の課題である成人聴覚障害者とののかかわりの橋渡しとして計画した。まだ始まったばかりの取り組みで、結果ははっきりとは見えていないが、その経過を検証しつつ更に活動を広げていきたい。

この研究を通して、改めて幼児に関わっている視点だけで聴覚障害教育を考えるのではなく、卒業生など成人聴覚障害者の考えや意見に真摯に耳を傾けることが大切であると認識した。本校を巣立っていった子どもたち、そしてすべての成人聴覚障害者からのメッセージが早期のコミュニケーションを考える鍵となる。今後も成人聴覚障害者からいろいろと教わりながら、聴覚障害児が自分らしく生きることのできるコミュニケーションについて考え続けたい。

おわりに

今回、みずは教育福祉財団障害児教育研究の助成をいただき、平成14年度の研究で見えてきた課題を実践の場に移す機会を与えられたことに感謝している。初めての取り組みに不安と迷いもいろいろあったが、同僚の助けもあり、この新しい取り組みをなんとか続けられている。一番の協力者は、この活動に参加してくれた卒業生たちである。こばと聾学校に在籍していた頃とは見違えるような成長ぶりを喜ぶと同時に、活動を共にすることでたくさんの方を教えてもらった。彼らが活動に参加する中で生き生きとした様子を見てみると、これからも共に手を携えやっていきたいと改めて考える。今後もこの実践を通して導かれた新しい課題を、成人聴覚障害者とのかかわりの中で、多くの方のお力をお借りしながら解決していきたい。

菅原⁽¹⁷⁾は「聴覚障害のある人々本人の意向や、社会の現実に視点を置いた情報の収集と教育への反映を図ることこそ、新しい時代を構築する礎となる」と言っている。まさにそのとおりで、教育者の立場で適切なサポートができるよう、さまざまな情報を収集しそれを見極め教育の現場に戻していきたい。また常に広い視点で特殊教育全体の変動を見据えながら、子どもたちにどのような力を培うべきか、学校として何に取り組むべきか等、いくつもの視点でこの教育を見つめていくことが大切であると実感した。聴覚障害教育を必要とするすべての子どもたちが自信を持って生き、自己実現を図ることができるよう微力ながら支援を続けたい。

最後に、この論文をまとめるにあたり、独立行政法人国立特殊教育総合研究所 聴覚・言語障害教育研究部 宍戸和成部長、聾教育研究室長 小田侯朗先生のお力添えをいただきましたことに、心より感謝しています。そしてこの活動を支え今後の指標を示してくださった兵庫県立こばと聾学校田邊ひろみ校長先生にも深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 特殊教育 120 年のあゆみ (1999) 文部科学省
- 2) 廣田 栄子 (1996) 聴覚障害教育情報ガイド コレール社 (吉岡 博英・四日市 章・立入哉編著)
- 3) 聴覚障害教育の手引き (1995) 文部省
- 4) 聴覚障害児のコミュニケーション手段に関する調査研究協力者会議報告 (1993) 文部省
- 5) 中野 善達・斎藤 佐和 (1996) 聴覚障害児の教育 福村出版
- 6) 井原 栄二 (1996) 聴覚障害教育情報ガイド コレール社
- 7) 草薙 進郎・四日市 章 編著 (1996) 聴覚障害児の教育と方法 コレール社
- 8) 永井 隆・松本 治雄 (1995) 聴覚障害学生のコミュニケーションモードに関する研究 (1)
- 9) 脇中起余子 (2002) 聴覚障害者本人および親の意識調査 (1) ろう教育科学 44 55-72
- 10) 足立 貢 (1991) 聴力の障害がコミュニケーションにおよぼす影響 ろう教育科学 32 (1) 11-41
- 11) 金山千代子 (2002) 母親法～聴覚に障害がある子どもの早期教育～ ぶどう社
- 12) 南村 千里 (2002) 看護教育～身体表現を通して自己を知る～
- 13) 小田 侯朗・横尾 俊 (2000) 聴覚障害児の障害認識に関する研究 国立特殊教育総合研究所研究紀要第 27 巻
- 14) 馬場 颯 (1996) 筑波大学附属聾学校紀要 18 1-12
- 15) 鳥越 隆士 (1999) 不就学ろうあ老人への援助 聴覚障害者の心理臨床 日本評論社 47-70
- 16) 武居 渡 (2001) ろう児はどのように手話を獲得するのか 手話コミュニケーション研究会 4-8
- 17) 菅原 廣一 (2001) 情報化社会と情報収集 聴覚障害

本書は、(財)みずほ教育福祉財団の
助成を受けて、刊行したものです。

障害児教育研究論文 —平成15年度—

聴覚障害教育における早期のコミュニケーションについて
～成人聴覚障害者とのかかわりを通して～

平成16年3月 印刷

平成16年3月 発行

編集・発行 (財)障害児教育財団
横須賀市野比5-1-1
国立特殊教育総合研究所内
